只見短歌会　三月詠草

大塚栄一　指導

彼岸前に抱く思ひを語らむと農家の友と日を打合はす　古川　英子

物忘れ日ごと進みて惚けし我一人居なれば尚更さびし　馬場　八智

春休み孫の好みし食事など思ひてわれは厨に立てり　関谷登美子

電子音ファンヒーターに炊飯器電子レンジも同じ音なり　新国由紀子

山を吹く風は高きを過ぐるらし立ち止まりては耳を澄ませり　小倉キミ子

涅槃会に寺まで自動車で行けるのは未だなきとぞ道に雪なし　渡部ゆき子

来客のありて急須に注ぐ湯のぬるき音たち詫びる思ひす　目黒　富子

咲き盛る水仙は雨に打たれるも光が射せば花をもたぐる　渡部ヨリ子

食料もなく痩せ細る幼子の画面に夕餉の箸摂れずをり　新国　洋子

（出詠順）

只見俳句会　四月例会

目黒十一　指導

強風に夫よろける春落葉　味代子

春の昼呼ばれてしばし空寝かな　恒夫

かたくりの花揺れながら存えて　礼

凍餅の一竿つるす大廂　吉児

くすぶって動かぬ煙養花天　順子

春惜しむごとくに稚児手渡しぬ　信

春雷や遺影の母は驚かず　修一

春光や仏壇にあるミニ碁盤　都

片付かぬ年度の整理シクラメン　一穂

持ち歩く二つの手帳残る雪　入学生挨拶状の角ばって

春の山緑のクレヨン淡く〜　敦子

芽柳や乳色となる只見川　曲り屋の屋根にペンペン草繁る

咲き満ちし夜の桜の静かなり　園児らの雀がくれに戯れる

桜咲きそぞろ歩きに声弾む　にぎやかに押し合い急ぐ春の川

春来り見沼の里に人集う　石垣に二つ寄り添う蕗のとう